

# 庭の造形 2007年

アルペン丸の内タワー公開空地・屋上庭園  
名古屋ルーセントタワー公開空地

Garden Projects 2007

Public Plaza and Roof Gardens of Alpen Co.,Ltd.  
Public Plaza of Nagoya Lucent Tower

岡田憲久

Norihisa Okada



水景と舗装。エントランスは円形に区切られた植栽で包み込むようなデザインとした。舗装は白ミカゲ石にスクラッチ仕上げをし、焼物のタイルでラインを入れリズムをつけた。(アルペン丸の内タワー、2007/6)



## アルペン丸の内タワー公開空地・屋上庭園

Public Plaza and Roof Gardens of Alpen Co.,Ltd.



公開空地のアイ・ポイントとしての水景。水の動きや音が憩いの空間を演出する。ベンチとしての植栽縁石が水景に食いこむデザイン。ベンチには人工地盤上で盛り上げた土を留める役割もあり、この足元には舗装のラインと同じタイルでアクセントをつけた。(2007/6)



舗装デザインの詳細 (2007/11)



雑木林で囲まれた公開空地。岩手県の山で育ったハウチワカエデ、ヤマモミジ、アオハダや低木のヤシオツツジなど、他にサルスベリ‘夏祭り’や常緑のシマトネリコなど。地被類はツルニチニチソウやローズマリー等すべて常緑のものを選択。右下はエントランス周りの舗装と植栽。木陰のベンチを設けている。(2007/6)





25階建てビルの外観。名古屋高速道路、丸の内ジャンクション  
すぐの伏見通り沿い。(撮影：エスエス名古屋、2007/8)



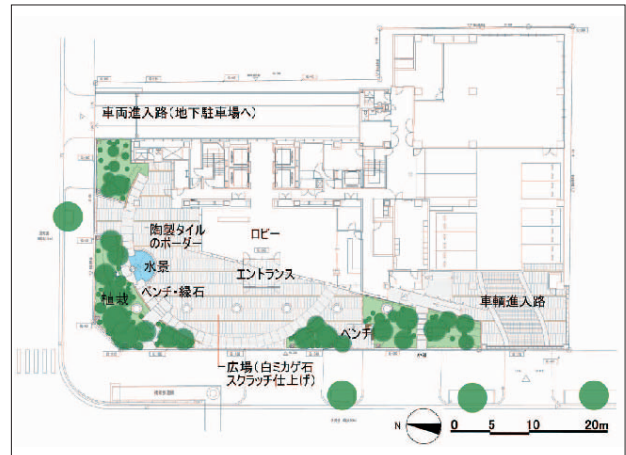
2階屋上庭園。オリーブの足元にアガパンサスが咲く。  
(撮影：エスエス名古屋、2007/8)



3階屋上庭園。バランスをとって配置した飛石。周囲は白  
のキョウチクトウなど生長早く環境圧に強い植物を選択。  
(撮影：エスエス名古屋、2007/8)

#### 作品データ

作 品 名：アルペン丸の内タワー公開空地、屋上庭園  
所 在 地：愛知県名古屋市中区  
建築設計監理：株式会社日本設計名古屋支社  
外 構 設 計：名古屋造形芸術大学 岡田憲久（景観設計室タ  
ブラ・ラサ）  
設 計 協 力：ESプランニング  
施 工：株式会社竹中工務店名古屋支店、日比谷アメニス  
設 計 期 間：2004年10月～2005年2月  
施 工 期 間：2007年3月～2007年6月  
規 模：公開空地約600m<sup>2</sup>、屋上庭園約350m<sup>2</sup>



公開空地平面図

当作品はスポーツ用品の製造販売企業、株式会社アルペンの本社屋（アルペン丸の内タワー）建設に伴う公開空地及び屋上緑地である。緑地とピロティー下の広場の合わせてわずか約600m<sup>2</sup>の公開空地の地下は駐車場で人工地盤上にできている。また建築敷地の二方が道路に接し、緩衝のための緑地も矩形のL型にならざるを得ない場所であった。この限られた条件下で都市へ緑を提供し、公共性を備えた広場に日本庭園の要素を融合させた、広場であり庭であるような空間を創出することに努めた。また、細部にわたって作り込みながらも、主張しすぎない端整なデザインを目指した。

#### 「日本庭園の現代への展開」への試み

私は日本庭園の重要な要素の一つを、凝縮した空間と余白空間のバランスにあると考える。当作品においては、外周緑地（凝縮空間）とピロティー下の石舗装広場（余白空間）のバランスとして表現した。

日本庭園の特質である室内と外部の相互侵入を大規模物件で実現するため、建築設計段階から内と外の一体化を提案し、公開空地とエントランスロビーの関係において成立させた。

ディテールにおいては、水景の吐水口に「かたくち」と呼ばれる古来の器から発想を得たデザインを施した。また、地場の焼き物である表情豊かな美濃の陶製タイルを舗装のアクセントとした。

近年において生まれた雑木の庭を、樹木・樹形を厳選し、都市のスケールの中で創出した。

#### 広場であり庭である空間創出への試み

日本庭園では白砂などが敷かれ、人間が侵入しない余白部分を、当作品においては、人が通り抜け、あるいはたたずむことのできる親密な空間とした。

素材には、石材や陶製タイルなど工場加工製品でありながらも素材そのものに表情があるものを選択し、そこに手わざが感じられる仕上げを施した。そしてそれらの組み合わせにも細やかな配慮をして庭的な演出を行っている。



名古屋ルーセントタワー公開空地  
Public Plaza of Nagoya Lucent Tower



広場平面はビルの形状である三日月型に重ね合わせた。中央の底下がビルのエントランス。敷地面積約14,000m<sup>2</sup>に対して緑地面積は2,800m<sup>2</sup>もうけられ、66本の高木が植えられている。名古屋駅前の再開発物件としては緑地が最も多い。(2007/7)



丸いベンチの中央に白玉ツバキ。三日月に沿うように並んだ植栽地には月にちなんでカツラが並んでいる。(2007/7)



緑陰に設置されたベンチで訪れた人がくつろぐ。地被植物は大部分が常緑のものが選択されているが、いずれも花が咲く。(2007/7)

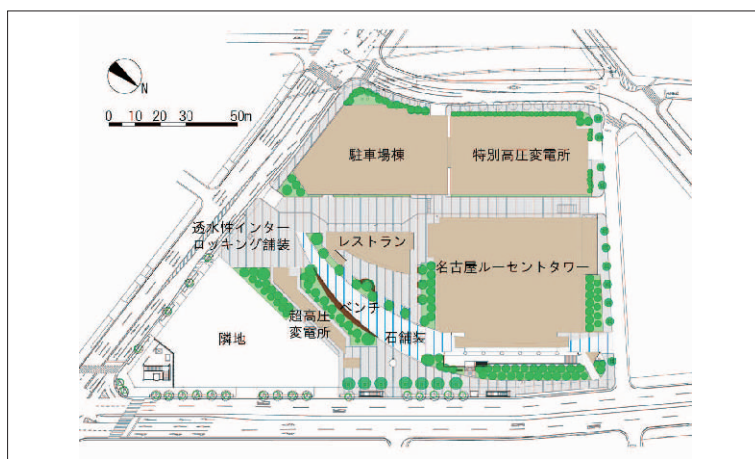




ミカゲ石のスクラッチ仕上げとジェットバーナー仕上げの異なるテクスチャーが逆光に反射してストライブを描き出す。青いタイルは土岐で焼いたもの。ラインの中心には照明。敷地面積の30%は透水性インターロッキングブロック敷きとなっている。(2007/1)



地上40階建てビルの外観(2007/1)



公開空地平面図

名古屋駅の北、牛島地区の再開発として名古屋ルーセントタワーが建設され、その足元の公開空地を設計監理した。ビルの形態が月に見立てられていたため、平面にも三日月のカーブを描き、月の影は桂の大樹の影だという中国の故事から、カツラの木が並ぶ広場とした。50mのロングベンチもその形態を補足する。中心には白玉椿をシンボリックに植えた。三日月部分の床面は白ミカゲ石のスクラッチ仕上げとジェットバーナー仕上げを交互に配置し、光と影の陰影が描き出される。

私はデザインとは「ある理想をその時、その場の日常の言語におきかえること」であると考えている。しかし今作品においても、複数の地権者や設計者、施工者などの事情が様々からみあった中でモノを収めていくことに、デザイン以上の労力と時間を費やした。

また、アートコンサルが建築に付随するアートを多数提案し、建築、ランドスケープ、アートが一体となって都市再開発の豊かな表情をつくり出している。

#### 作品データ

作品名：名古屋ルーセントタワー公開空地  
所在地：名古屋市区  
建築設計監理・総合ランドスケープ設計監理：日建設計  
ランドスケープ設計監理：名古屋造形芸術大学 岡田憲久  
(景観設計室タブラ・ラサ)

設計協力：ESプランニング  
施工：大成建設、諸戸緑化産業(植栽部分)  
外構設計期間：2005年10月～2006年12月  
外構施工期間：2006年12月～2007年1月  
規模：約6,500m<sup>2</sup>、内緑化面積約2,800m<sup>2</sup>